

橋梁設計計画システムにおける初期想定について

京都大学工学部 正員 白石成人 京都大学工学部 正員 松本 勝
熊谷組 正員 岸 研司 京都大学大学院 学生員 谷川浩司

1. まえがき 橋梁工学の進歩、橋梁形式の多様化、架橋条件の複雑な関連関係など、橋梁の建設に関する背景は複雑である。そこで、近年、橋梁設計計画の各プロセスをシステム化し、より合理的な設計を行おうという動きがみられている。すなわち、計画・設計・施工・維持管理の過程を明確にし、設計の能率化と省カ化を図るという、設計者の独自性を対話型で反映できるシステム構築の動きである。本研究では、そのシステム化への第1歩として、初期想定システムというものを導入することを考えた。本報告は、初期想定概念、初期想定システムの概要について述べるものである。

2. 初期想定概念 現在の橋梁設計の流れには、今一貫性がないために、対象としている橋梁形式の工費や工期が、詳細設計の段階で、当初のものとは大幅に変動したり、実際には架設や施工が困難な形式が採用される、などの問題がときおり生じている。そこで、橋梁設計の流れに一貫性をもたせるために、「地形・地質・環境など架橋地点の種々の条件に対して、計画段階(すなわち、設計の流れの初期の段階)で、経済性・施工性・構造特性などにわたり広く検討を行い、以後の設計段階でフレキシブルな発案できる橋梁形式案を複数想定する」ことを考える。これが、初期想定である。なお、この初期想定をコンピュータを利用してシステムタイクに行うものが、初期想定システムである。

3. 初期想定システムの概要 初期想定システムの骨組を同一のように考えた。本研究では、図中各ルーチンの処理方法について検討を加えたが、現段階では、コンピュータへのプログラム化は行っていない。なお、紙面の都合上、各ルーチンの処理方法の詳細の説明は省略する。(基礎工選定についてのみ概要を後述)以下、システムの概要について述べる。(1)(図中の番号)により、基礎および上部工設置不可能領域を決定し、図示する。(2)および(3)により、第1次スパン割案を作成し、図示する。なお(2)は橋長に対して上部工の単独・連続形式の区別を考慮したスパン割を行うもので、基礎工設置不可能領域の個数と幅および平均橋脚高の組合せを11ケース考え、各々のケースごとにスパン割の方法を定めた。(4)により、第1次スパン割案において修正が必要なものを修正し、その後二通りの案から第2次スパン割案を抽出する。このルーチンは、当面は対話型処理を考える。(5)により、第2次スパン割案に対して上部工形式を選定し、表の形で出力する。このルーチンでは、

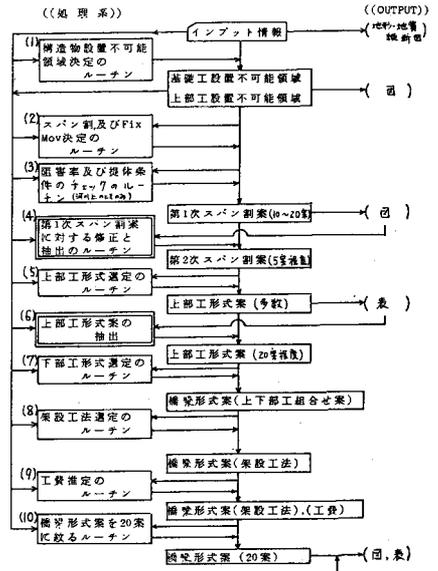


図-1 初期想定システムフロー

通用支間長により形式を選定する。(6)により、多数の上部工形式案を絞り込む。当面は、対峙型処理を考へる。(7)により、おのづかの上部工形式案に対して、下部工形式を2,3種程度選定し、橋梁形式案を作成する。橋台・橋脚については選定表を、基礎工については数量化理論Ⅱ類を用いた選定手法(後述)を作成した。(8)により、架設工法の選定を行う。コンクリート橋に関しては選定表を、鋼橋に関しては、フローチャートと選定表を組合せて選定手法を作成した。(9)により、橋梁形式案おのづかの工費を推定する。工費推定式により行う。(10)は、工費の小さいもの上位20案と抽出するルーチンである。(11)により、橋梁形式案を画像化し、地形・地質図に重ねて図示する。この際、形式別に標準的な形態をコンピュータに記憶させておき、おのづかを利用する。おのづか形式名・架設工法・工費を表で出力する。

—基礎形式選定手法—

図-2に選定手法の流しを示す。本選定手法では、過去の実績データ(1670例)に数量化Ⅱ類を適用した分析結果を利用する。

④~⑥に用いるアイテム、カテゴリを総括したものが表-1である。ここでは紙面の都合上、④のみの説明に留める。外的基準を直接基礎・杭、ケーソンとする。選んだアイテムおよび分析結果が表-2、図-3、図-4である。表-2により選定の対象とする基礎工の得点Y(1軸)、Y(2軸)を計算し、対象とする基礎工を、
 $Y(1軸) \leq -0.55$ のとき、直接基礎
 $Y(1軸) > -0.55$ のときは、Y(2軸)を考慮し、
 $Y(2軸) \leq -0.15$ のとき、杭
 $-0.15 < Y(2軸) \leq 0.67$ のとき、杭、ケーソンの両方
 $0.67 < Y(2軸)$ のとき、ケーソン
とする。これらの数値は図-3、4からの判断による。なお、分析データの都合上選定要因としてのアイテムにもおのづかがあるため、表-3に示す要因を付加し、形式変更を行う。④~⑥も④と同様の方法である。

4. おのづか 本研究では、初期想定システムの骨組となる流しを作成し、システムを構成するルーチンについて検討を加えた。今後は、ケーススタディにより本システムの実橋への通用性を検討すると共に各ルーチンの不備な点を改善し、プログラム化を進めていくことが課題となる。

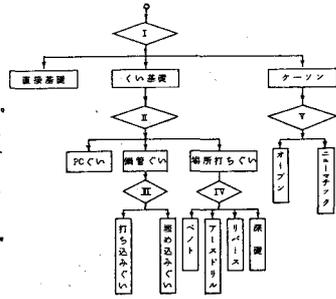


図-2 基礎形式選定手法の流れ

アイテム	カテゴリ	1 軸	2 軸
1	1	0.036	0.140
1	2	-0.210	-0.210
1	3	-0.019	-0.106
2	1	0.008	0.013
2	2	-0.210	-0.160
2	3	0.100	-0.161
2	4	-0.441	-0.167
2	5	0.668	-0.243
3	1	-0.039	0.019
3	2	0.073	-0.234
4	1	0.098	-0.321
4	2	0.014	-0.140
4	3	-0.100	0.100
4	4	-0.108	1.227
4	5	-0.265	0.257
5	1	0.011	-0.200
5	2	0.096	-0.639
5	3	0.015	0.365
5	4	0.184	-0.042
5	5	-0.397	0.100
5	6	-0.148	-0.397
6	1	0.097	-0.254
6	2	0.040	-0.209
6	3	-0.097	0.399
7	1	-0.016	-0.214
7	2	0.089	0.222
7	3	0.048	0.840
7	4	-0.065	1.234
7	5	-0.217	0.408
7	6	0.059	-0.286
7	7	-0.012	-0.282
8	1	-0.018	0.030
8	2	-0.011	0.500
8	3	-0.001	0.365
8	4	-0.021	0.290
8	5	-0.048	0.507
8	6	0.059	-0.286
8	7	-0.012	-0.282
9	1	0.009	-0.131
9	2	-0.031	0.400
10	1	0.026	0.029
10	2	-0.189	-0.222
11	1	0.059	-0.207
11	2	-0.034	0.121
12	1	0.051	-0.086
12	2	-0.027	0.084
13	1	-0.013	-0.148
13	2	0.101	0.544
13	3	-0.047	0.714
13	4	-0.165	0.283
13	5	-0.299	1.258
14	1	0.041	-1.163
14	2	-0.001	0.024
15	1	0.043	1.291
15	2	-0.003	-0.112
16	1	-1.327	-0.054
16	2	-0.626	0.224
16	3	0.770	0.227
16	4	-0.925	0.624
16	5	0.943	-0.411
16	6	1.000	-0.291
16	7	0.876	0.355

表-2 カテゴリウエイト

アイテム	カテゴリ	アイテム	カテゴリ
1	1	11	1
1	2	12	2
1	3	13	1
1	4	14	2
1	5	15	1
1	6	16	2
1	7	17	1
1	8	18	1
1	9	19	1
1	10	20	1
2	1	21	1
2	2	22	1
2	3	23	2
2	4	24	1
2	5	25	1
2	6	26	1
2	7	27	1
2	8	28	1
2	9	29	1
2	10	30	1

表-1 アイテムとカテゴリ

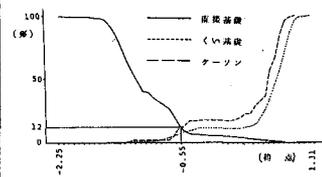


図-3 度数累積曲線(1軸)

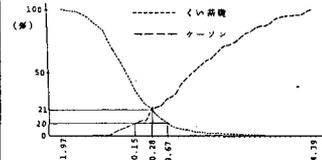


図-4 度数累積曲線(2軸)

選定	A → B (A < B に変更)
選定の危険大	直接基礎 → 杭基礎
表層の洗削化層	直接基礎 → 杭基礎
経路 20' 以上	直接基礎 → 杭基礎
支持層の圧入限界大	直接基礎 → 杭基礎
地震面の地割化	杭基礎 → ケーソン

表-3 形式変更要因